

=====

宇宙には行けない (2017 年版)

=====

とある海辺の町の地下室

制服の女子中学生(エミ)と男子中学生(イトウ)が地べたに座って話している

水着なしラッシュガード、または泳ぎに行けそうな格好の女子(従姉妹)が傍らで立ってそれを眺めている

エミ:たとえば、こういうのはどう? 核戦争で滅びた世界

イトウ:ああーなるほど

従兄妹:え、なにに 199X 年?

イトウ:それ、もう昔じゃん

従兄妹:世界が滅亡するのは 199X 年で決まってるんだってば

エミ:でね、

イトウ:うんうん

エミ:外は、巧妙に人間化した人食いゾンビたちがあふれているの

従兄妹:ギャヒー!

エミ:あの、従兄妹ちゃん、うるさい

従兄妹:別に従兄妹って名前じゃないんですけど

エミ:名前知らないもん

従兄妹:お前に教える名前はねえ!(次長課長の河本のタンメンのヤツ風)

エミ:別に聞いてないし

従兄妹:ついでにお前の従兄妹じゃねえ!

イトウ:ちょっと、うるさいぞ従兄妹

従兄妹:え、しんちゃんまで従兄妹って呼ぶことないじゃん

イトウ:いや、むしろ俺の従兄妹だし

従兄妹:だ〜け〜ど〜ん

エミ:あの、続けたいんだけど

従兄妹:勝手に続ければ

イトウ:じゃあ、勝手に続けよう(エミを連れて従兄妹からはなれる)

従兄妹:あ、ちょっとー

エミ:でね、この町は、たそがれ時を過ぎたとたん、真夜中になってしまうの。つまり、夜になったら誰ひとり外に出ない。この町の夜には魔物が住んでるから。

イトウ:いいね

従兄妹:ねえ、なんの話なのこれ?(こそこそ)

イトウ:ほんとの話だよ(こそこそ)

エミ:人の心はね、その人の住んでいる場所の景色に似るものなの。町は住んでいる人たちの心が作り出す模様だから。どこに駅があるか。どこに森や山があるか。川はどんなふうに流れているか。それは、実はみんな住む人々の心と同じだっていうことなの。みんな勝手に、思い思いにひとつの町を構成する。そう思ってる、でもちがうの。勝手に、

というのは人々の思いあがりよ。

イトウ:たしかにね。都市っていうのは、そうやって人間の闇の部分形成してしまうものなんだ。だから、逆に歓楽街とか風俗とか、汚いもの淫らなものを無理に排除しようとする都市に歪みが出る。多摩ニュータウンとか、つくば学園都市とか。自殺者が年々増えてるって。

エミ:そう。

従兄妹:え～自殺～！？

エミ:…

イトウ:…

従兄妹:で、で？

エミ:…ちょっとイトウくん

イトウ:うん。あのさ、従兄妹

従兄妹:だから、従兄妹って呼ぶなよ

イトウ:だって、お前はおれにとってかけがえの無い従兄妹だから

従兄妹:そうなの？

イトウ:そうだよ。いつもあんまり言葉にできなくてごめん。

従兄妹:ええ～、そっかあ。いいよ、いいよ、伝わってたよ十分

イトウ:よかった

従兄妹:ねえ、泳ぎ行くんでしょー？

イトウ:もちろん、だけど俺、今すごいことに気づいて

従兄妹:え、何？

イトウ:うん、この(ズボン)下、何も穿いてないや

エミ:！！

従兄妹:ええー？

イトウ:海パン穿き忘れた

従兄妹:もうー、しょうがねえなー、わたし取ってきてあげるよ

イトウ:マジで？恩にきる

従兄妹:いいっていいって。

従兄妹、部屋を出て行く

エミ:行っちゃったわね

イトウ:ああ。君が望んだことだろ？

エミ:あなたが望んだことでもあるわ

イトウ:そうかな

エミ:そうよ

イトウ:そうか

エミ:まんまと二人きりになって、私をどうするつもり？

イトウ:え？

エミ:わたしだって、バカじゃないわ。この世に生を受けて 15 年、学校じゃ教えてくれないようなことだってそろそろ勉強中

イトウ:何を言ってるのかわからないよ
エミ:ずるいのね、そうやって女の私に最後まで言わせる気？
イトウ:これはまだ最初の方さ、だからレディーファースト
エミ:世界は滅亡した。この地下室の外は人喰いゾンビたちで溢れていて他には誰もいない、言わば私たち二人は、世界に残された最後のアダムとイヴ
イトウ:らしいね、君の想像力によると
エミ:こんな話を聞いて、誰もいないこの地下室、思春期の男の心が考えることなんて1つよ
イトウ:なんだろう、興味深い話だな
エミ:つまり、わたしたちに残された運命は 2 つ。このまま人類の終焉を迎えるか、それとも再びエデンの園を出て人間の物語をはじめるか？
イトウ:エデンの園か。だけど、こんな地下室じゃリンゴの木だってみつからない
エミ:あれは例えよ、果実はメタファーに過ぎないの
イトウ:その「メタファー」が真に意味するところは？
エミ:言えない
イトウ:じゃあ、書いて
エミ:書けないわ、そんなの
イトウ:平仮名で大丈夫だよ
エミ:そういう意味じゃ、ない…。
イトウ:…
エミ:…
イトウ:(エミに近づき、肩を抱こうとするが、)
エミ:やめて、触る人は嫌いよ
イトウ:触ってなんかいないさ
エミ:じゃあ、この手は何？
イトウ:たまたま僕が手をやったところに、君がいたっただけだよ
エミ:詭弁ね
イトウ:そうじゃないさ。さっき、君は言ってただろ。人間の心のありようが、現実の町や都市を形作るって。それと同じ。君のアダムとイヴの話が、この地下室のありようを、ほんの少し変化させたんだ(また肩に手を置こうとするが)
エミ:やめて、あなたをそんな、クラスのくだらない連中と同じ存在にしていまいたくない
イトウ:くだらない連中？果たしてそうかな。それも、君の心のありようが連中をそうかたどらせているだけなんじゃないかい？
エミ:お説教は聞きたくないわ。そんな心理学者崩れのスクールカウンセラーもどきな話をしにここへきたの？
イトウ:いや、そうじゃない
エミ:だったら教えて、あなたの心のありようを。それがなきゃ、この地下室のありようは、半分しか形作られない。
イトウ:…ごめん、僕、少し怯えていたのかもしれない。
エミ:わかるわ。わたしだって…本当は怖いもの。
イトウ:どうして？
エミ:だって…わたしの話は、全部わたしがわたしの頭の中で考えただけのもの。わたしの考えている世界と、それ以外の人間、例えばあなたの目に見えている世界は別物だから
イトウ:一緒かもしれない

エミ:証拠が欲しいの

イトウ:証拠?

エミ:そう。イトウ君が優しい人だってことはわかってる。学校で、うん、この町でただ1人わたしの話を真剣に聞いてくれるんだから

イトウ:君の話はとてもおもしろいよ

エミ:ありがとう。でも、わたしは知りたいの。その理由を

イトウ:理由なんて。君が魅力的だからさ(手を伸ばすが、)

エミ:(一歩はなれて)、違う。こういうんじゃない!

イトウ:「こういう」って?

エミ:だから…。別にわたし、そういうのが嫌だって言ってるわけじゃないのよ

イトウ:だから「そういう」のって?

エミ:だから、その…ああいうのよ

イトウ:(笑った)

エミ:笑わないでよ。

イトウ:さすが文芸部だな。一つのことを言うのに、いろんな指示語を使ってくる

エミ:茶化さないで。

イトウ:茶化してないよ。

エミ:、証拠が欲しいの!あなたが、クラスのくだらない連中と違う、単に私のことを面白がってからかっているだけの男子じゃないっていう!

イトウ:あるよ、証拠

エミ:え?

イトウ:ここに(ズボン)

エミ:ええ…?

イトウ:さっき、僕はこの下に何も穿いてないって言ったろ?

エミ:う、うん

イトウ:それ、本当だと思うかい?

エミ:え、ええ?わからないわ。そんなの

イトウ:泳ぎに行くのに海パンを穿き忘れる?そんな馬鹿なことってあるか。僕はわざと穿いてこなかったんだ、

エミ:そうなの?

イトウ:ああ。でも、今のは嘘かもしれない。僕は、本当は君をからかった後、あの愉快的な従兄妹と一泳ぎして帰る気マンマンで、今、この中に海パンを穿いているのかもしれない。

エミ:え?

イトウ:それは、ここを開けてみるまで分からない。確率は二分の一だ。今、真実は揺蕩っている。開けて、確かめてみるかい?(ずい)

エミ:え、ちよ、無理!

イトウ:だろ?それでいいんじゃないかな?

エミ:はあ?

イトウ:真実の一つじゃない。不確かな二択が可能性として同時に存在している状態、それがこの世界の姿だ。

エミ:…シュレディンガーの猫ね

イトウ:ご名答。さすがは君だね。

エミ:箱の中の猫が生きているか死んでいるかは箱を開けてみるまで分からない。でも、もし箱を開けることができないなら、猫はこの世界にとって、50%生きていて50%死んでいる。

イトウ:そう。すごいよ。人の気持ち、世界のありよう、そんなもの僕たちの気持ち一つなんだ(ずいと近寄る)

エミ:あっ…

イトウ:制服がしわになるよ?

エミ:……。 (制服を脱ぎ始める、下には学校指定の体育着が。)

イトウ:(それを待つ間、部屋をうろうろ)

エミ:(脱ぎながら)でも、わたし思うの。やっぱり、真実は一つなんじゃないかって。だって言うじゃない、「神様はサイコロを振らない」って。

イトウ:アインシュタインだろ。あんなの、量子力学の不確定性原理に腹を立てた、感情のもつれみたいなものさ。

エミ:わたしはそうは思わない。事実が不確かなのは、それを観察しているのが、私たち人間だからであって、神様だったらそんな間違いはしない

イトウ:それは神様なんかじゃない、「ラプラスの悪魔」さ。この世界のありように不確かさがなかったら、未来は既に決定されてしまっていて、僕たちは自分の運命を自分で切り開くことができないことになる!

エミ:でも、真実は一つじゃない!(←肯定)(ズボンを指さして)

イトウ:じゃあ、開けてみるんだな、パンドラの箱(ズボン)を!

エミ:……。

イトウ:開いたときには手遅れになっているかもしれないよ

エミ:(躊躇していたが…やがてゆっくりと手を伸ばし、)

そこへ、従兄妹が戻ってくる

従兄妹、まるで海に入ったようにずぶ濡れになっている

従兄妹:ぎゃひー! ちょ、ちょっとあのね、って、ええー! ?

エミ:あ、違う、違うのよこれは!(つと、急いで離れる)

従兄妹:なーにが違うんだ、その格好で、このエロガッパ!

エミ:これは、その、シュレディンガーが

従兄妹:シュレディンガー? なんかエロそうなこと言いやがって! 不純異性交遊もいい加減にしろ!

イトウ:大丈夫だよ、まだ何もされてなかったから

エミ:ええ! ?

従兄妹:ったりめーだよ! しんちゃんにもしものアレがあったら、わたしお天道様にアレできないから

イトウ:ごめんな、心配かけて

エミ:ええー?

イトウ:それより、どうしたんだよ? ズブ濡れじゃんか

従兄妹:あ、ああー! このイメクラ女のせいで忘れてた! そ、そそそそそ、外!

イトウ:外?

従兄妹:外がなんか、怖い!

イトウ:は?

従兄妹:な、なんか人が、ゾンビ!

二人:はあ?

従兄妹:よくわかんない、よくわかんないけど、なんかバイオハザードしてて

イトウ:バイオハザード？

従兄妹:うん。家帰るとき道でみつかって、ゾンビのくせにすごい足速くて、あの大瀬戸の橋のところでさ、挟み撃ちみたいになっちゃったから、海飛び込んで泳いで逃げた。怖かったよー！

イトウ:ええー？

従兄妹:マジやばいって、人喰ってたし

エミ:ちょ、ちょっと

従兄妹:なに！

エミ:悪い冗談も大概にしなさいよ、それ、さっき私が話した話じゃない

従兄妹:そうよ！知ってたんならなんで先に言わねんだよ！うら若い命一つ散らすとこだったじゃんかよ！

エミ:あなたね、言っている冗談と悪い冗談があるのよ

従兄妹:お前のその格好は冗談じゃないけどな

エミ:そんなすぐバレる嘘ついて、おもしろくもなんともないわ

従兄妹:おもしろとかじゃねえって！

イトウ:まあまあ、外出てみりやすぐ分かるんだし。な、従兄妹も話に加わりたかったんだよな、ごめんなー

従兄妹:だから、違うってば、従兄妹って呼ぶな

イトウ:とにかく、外見てみよう

三人、出口の方に向かうが、
エミ、そういえば、割とあられもない格好だった
表に出るのを躊躇するエミ

従兄妹:なんだよ？

エミ:いや、ちょっと、服着てから

従兄妹:いまさらだろ！

エミ:でも

イトウ:じゃあ、エミちゃんはちょっと待ってて

エミ:うん

従兄妹とイトウ、出て行く
ほどなくして二人慌てて戻ってきた

二人:おわーーーー！！！！

エミ:え？ええっ？

二人:ゾンビ、ゾンビが！

エミ:はあ？

イトウ:ほ、本当だった。入り口のドアの前まで、もうウジャウジャ！

従兄妹:しんちゃん～(泣)

イトウ:大丈夫、大丈夫だぞ従兄妹～

エミ:ちょ、ちょっと、嘘(出口を見に行こうとする)

イトウ:ば、バカ！やめろ！危ない！

エミ:え、ええ？

イトウ:ドアにカギかけて、本棚で塞いであるんだ。でも、いつ破られるかわからない！

エミ:う、うそ？

従兄妹:嘘ついて、どうすんだよ！あんた1人騙して遊ぶために、わざわざこんなズブ濡れになると思う？

エミ:そんな、まさか…

イトウ:恐れていたことが起こってしまったみたいだ

エミ:え？

イトウ:実は、この町に引っ越してきたときから、こんな予感はしてたんだ

エミ:予感？

イトウ:うん、運命って言うてもいいかもしれない

従兄妹:なにそれ、どういうこと？

イトウ:エミちゃんの心のありようが、この町に強い影響を与えているって考えられないかな？

エミ:は？

イトウ:いや、最初は小さな疑いだったんだ。だから、まずクラスで孤立していた君と友達になって、そして、君ん家のこの地下室を、僕の趣味のアトリ王として出入りさせてもらえるようこぎつけた、そして、君のそばになるべくいられるよう心がけた…

エミ:そ、そうだったの？

イトウ:ああ、そうしたら恐ろしく君の言う言葉と町で起こる出来事が符号していたんだ…翌日の天気、交通事故、停電、台風、馬のお産。君の言う通りになった

従兄妹:ええー。じゃあ、なに？エミちゃんはこの町の…

イトウ:創造主、神様って言うてもいいのかもしれない

従兄妹:神様あ！じゃあ何、お前がゾンビとか言ったから、町中あんななつちやっただってことか、てめえ、なにしてくれてんだよ！

エミ:だって、だってそんな、そんなことって、ありえないわ

従兄妹:なんだよ、さっきまで偉そうに偉そうなことしゃくれしゃべってたくせによ！

エミ:だって、だってこんなことになるなんて…

従兄妹:だってもヘチマもあるか！

エミ:ねえ、ほんと？ほんとうにそうなの？

イトウ:本当のところはわからない。でも、僕がこの町に引っ越してきてから4年、君のことをずっと追っていたけれど…

エミ:ねえ、待って！

イトウ:うん？

エミ:っていうことは、イトウ君は、わたしがこの町の神様だと思ったから、わたしに近づいてきたの？

イトウ:え？

エミ:わたしの話がおもしろいからとか、わたしのことが魅力的だったからとか、そうじゃなかったの？

従兄妹:んなわけねーじゃん

エミ:愚民は黙ってなさい！

従兄妹:え、もう神様気取り？

エミ:答えて！

イトウ:……。

エミ:ねえ、わたしのこと、どう思ってるの？

イトウ:…正直わからないんだ

エミ:そんな、

イトウ:今、この瞬間の気持ちのことならなんとでも言える。でも、この僕の気持ちが、君の心のありようが僕に影響をもたらして、そうさせたんじゃないとは言い切れないんだ

エミ:あっ

従兄妹:なに、つまりあれ、お前がなんかその神様パワーみたいのでしんちゃん操って、無理矢理お前のこと好きにさせた、みたいなこと？

エミ:そんなことない

従兄妹:この野郎、恥ずかしくねえのか！卑怯な恋愛しやがって！こっちはどんだけ苦労して繊細な恋愛してると思ってるんだ

二人:は？

エミ:今、あんたの恋愛は関係ないでしょ？

従兄妹:おおありなんだよ！

エミ:はあ？

従兄妹:こちとら、何年しんちゃんに金魚のフンよろしく付きまわってると思ってるの？

イトウ:へ？

従兄妹:12年だよ12年！4歳のときから、盆暮れ正月、遊びに行ける口実さえありゃあ、しんちゃん家におしかけて、風呂も入れれば一緒に布団でも寝る、押入れてこっそりお医者さんごっこだったよ！

イトウ:おいおい！

エミ:え、ちょっと待って4歳から12年で、あんたいくつよ

従兄妹:16よ、花の高校一年生だよ

エミ:え、年上？

イトウ:あ、言わなかったっけ？こいつ一学年上

従兄妹:そうよ、敬いなさい。猫だって一日でも早く生まれりゃそっちが偉いんだから

エミ:はあ？ばかじゃないの、こっちは神様よ

従兄妹:知るかよ、こっちはお年玉全額縁結びのお守りに使ってたよ、さっさと叶えろよ！

イトウ:ちょ、え、従兄妹お前何言ってるんだよ

従兄妹:こんなときの勢いじゃなきゃいえないだろ！つか従兄妹って呼ぶな！

イトウ:勢いって

従兄妹:ゾンビがそこまで来てんだよ

イトウ:いや、お前、だってそれはさ…

従兄妹:こんな思い…胸に温めて死ねっかよ。神様だかなんだ知らねーけど、こんな黒髪長髪ザンギリ女に、わたしのしんちゃん取られてたまっか！（エミにつかみかかる）

イトウ:ええー！？

2人、キャットファイト 体育着 VS サーフスーツ

女子レスリングみたいな、女相撲 神話的ですらある

なんかごろんごろん転がる地味だけどすごいファイト

イトウ:やめろって、やめろってば。どうしよう、僕はどうすれば！（と、言って写メを撮ったりオロオロ）

2人、息があがって離れる

2人:はあはあ

エミ:イトウくん、あなたが決めてよ

イトウ:え？

従兄妹:そうだよ、結局そこだよ

エミ:相手はゾンビよ、こんな地下室のドアなんて破れるのは時間の問題

従兄妹:だからその前にハッキリさせてよ、死んでも死に切れないよ

イトウ:いや、だって従兄妹、ゾンビっていうか、その外は別にさ…

従兄妹:どっちなんだよ！

(以下ラストまで、2017年に小改訂)

そのとき、出口の方から、ドアが破ろうとする大きな音

従兄妹:ドアが

エミ:破られた？

イトウ:え、誰に？

二人:(エミ:ゾンビよ！(従兄妹:ゾンビだよ！)

イトウ:え、ちよ、待って、ええ？従兄妹、ええ？

従兄妹:従兄妹って呼ぶなよ～なんでだよ～(哀)

イトウ:え、だって

従兄妹:しんちゃんにとって、わたしはやっぱただの従兄妹なの？わたし、結構がんばったよ？ 毎晩星に願いをつつて。空にあの星があるかぎり、わたしはしんちゃんを思うって決めて

エミ:わたしだって！イトウ君は、この町で唯一人、私の話に耳を傾けてくれる…空から舞い降りた光、希望の星なんだから

従兄妹:あ、星真似すんなよ

エミ:うるさい、あんなもの空にうなるほど光ってるでしょ

イトウ:いや、今そんな話してる場合か

従兄妹:場合だろ

エミ:もうラチがあかないわ。そろそろ決着をつけましょう

従兄妹:のぞむとこだよ！

エミ:イトウ君、ズボン脱いで

イトウ:ええ！？

従兄妹:おいおい、そっちの決着かよ…正体あらわしやがってこのエロガッパ！負けねえぞ！（と、なんか口と舌をなめずりなのか、吸引なのか、よくわからない謎の技の準備体操）

エミ:違うわよ、海パン！

従姉妹・イトウ:え？

エミ:海パンを穿いてるのかいないのか、それで勝負よ

従兄妹:なんでだよ？

エミ:シュレディンガーの猫が生きてるのか死んでるのか、この目で確かめるの！

従兄妹:ん、よくわかんねえけど、あれか？要は 2 人でしんちゃんのズボンを脱がして、しんちゃんのシュレディンガーをアレすると！ニャンニャンすると！ったく、まわりくどい言い方しやがって！このエロガッパ！

エミ:いくわよ

従兄妹:おう

エミと従兄妹、いまにもイトウのズボンに飛び掛らんばかり

イトウ:ちょ、ちょっと待って！待ってくれ二人共！

従姉妹:いまさらなんだよ？

エミ:往生際が悪いわね、その手をどけなさい

イトウ:い、今ここを開けたら大変なことになってしまう

エミ:どうなるっていうのよ？

イトウ:僕のシュレディンガーが…爆発する！

エミ:そんな凶暴なシロモノかしら

従姉妹:昔見た時は、子猫みたいなシュレディンガーだったけどな

イトウ:やめろ！

エミ:じゃあ、どうするの？私達 3 人、この暗い地下室で一生不確かなまま？

イトウ:こんな事、無意味だ

エミ:どうして？あなたが海パンを穿いていれば、今日の話は全部わたしの空想、外のゾンビ達も、従姉妹ちゃんの作り話って事になるじゃない？

従姉妹:え、そうなの？

イトウ:いや、そうはならない

エミ:え？

イトウ:観察者効果さ

エミ:観察者効果？

イトウ:観察するという行為そのものが、相手に影響を与えてしまうんだ

エミ:観察という行為が相手に影響を与える…

イトウ:そうだ

従姉妹:見られてると興奮するって話か？

イトウ:違う！エミちゃんに、町中の人間をゾンビに変える力があるなら、僕のズボンの中身を変える力だってあるはずってことさ

エミ:あ…

イトウ:つまり、今君がここを開けてしまったら

エミ:イトウくんの本当の気持ちは永遠にわからない…

イトウ:ザツツライト、君にとって僕は、外にいるゾンビ達と変わらなくなってしまう。「哲学的ゾンビ」ってやつさ

エミ:哲学的ゾンビ…

従姉妹:え、しんちゃんゾンビだったの？

イトウ:彼女次第だ…真実は揺蕩っている。今僕は 50%ゾンビで 50%人間の状態だ。だけど、ひとたびここを開けてしまつたら、海パンを穿いていようがいまいが、君にとって、僕はもう価値のない人間になってしまう

エミ:…そんな

イトウ:パンドラの箱さ

エミ:ずるいわよ。それじゃ、もう、確かめる術がないじゃない！あなたの、本当の心のありようを

イトウ:いいんじゃないか、それで

エミ:え？

イトウ:そもそも確かめる必要なんてないんだ、他人の気持ちなんて

エミ:確かめる必要がない？

イトウ:ああ。…さっき僕のこと、星の光に例えただろ

エミ:うん

イトウ:だけど星って、今見えてる光は、実は何万年も前のものさ

従兄妹:そうなの？

エミ:そうね、ものすごく遠いから

イトウ:今、この瞬間、夜空に見えている星だって、本当は、もう寿命が尽きていてそこに無いのかもしれない。それは誰にもわからない。望遠鏡で覗いても、ロケットに乗っても、遠すぎて絶対にたどり着けない。人は宇宙にまで星の光の真実を確かめには行けないんだ。だけど、それでいいじゃないか。今、目の前に広がる星空は、こんなにも美しいんだから

エミ:…とんだ詭弁ね

イトウ:そうかな

エミ:そうよ。…だけど、いいわ、騙されてあげる。あなたのその、曖昧で不確かな量子理論に。

見つめ合う2人

少し、間をおいて、ドアを破るような大きな音

従姉妹:え、ちょっと、なんか話まとまっちゃったみたいだけど！ あれは？ゾンビはどうするの？

イトウ:大丈夫、たぶん、ゾンビじゃない

従姉妹:ええ！？

イトウ:おおかた、近所に住んでる誰かだよ。僕らがうるさくしてたから、様子を見に来たんだ。ちゃんと謝ればきっと許してくれる

従姉妹:いやいや、え？そうなの？

イトウ:そういうことに、なるはずさ。たぶん

従姉妹:たぶん？

イトウ:さあ、行こう。2人でエデンの園を出て人間の物語を始めるんだ

エミ:うん…でも

イトウ:でも？

エミ:少しだけ残念…あなたのシュレディンガー、見れなかったから

イトウ:フフ…仕様の無い子だ

イトウ、指パッチン。するとふいに暗転

エミ・従姉妹:え？

エミ:何？

イトウ:…強く念じてごらん、心に星を

二人:え？…うん

二人が強く念じていると、やがて一つの光が
それは、イトウのズボンの中に入れられた電球？

2人:あっ…きれい

やがて、ズボンのチャックが開けられ、中から光が飛び出し二人の顔を照らす

従兄妹:これがしんちゃんの、

エミ:シュレディンガー

二人:…素敵！！

暗転

了